

六月八日 晴天 京都出發

去る六日の市内見學は天候の都合上市内全部を見學する事不可能なりし爲め本日午前七時より午後八時まで自由行動を取つて各自希望の處に行きて京都の氣分を味ふ。午後八時全部集合人員を點呼し同十一時一同旅裝を整へ俱樂部を辭して京都驛に赴き午後十二時の列車にて光山學院學生諸君に見送られ、去り難き西の都を後に出發す、而して明れば六月九日午後四時身延に着、殘留生諸君に迎へられて共に校歌を奏しつゝ無事歸山す。一行は三門前に於て佛祖三寶に見學旅行隊の無事終了を奉告し萬歳を三唱して解散せり。

最後に謹んで今回修學旅行中歡待を辱ふせる各寺院及び信徒諸氏に對し謝意を表して擱筆す。

(以上吉川記)



會報

【庶務より】

茲二三年は可成り山を擧げての祝典が重つた、聖誕七百年、世界平和紀念法要、立止大師號宣下書奉戴式、其都度滿山の大衆と相交つて甲斐々々しく立働いた吾學園師徒の努力は、山の歴史と俱に蓋し忘る能はざる事の一つであらう。其處に道思ひの淳厚さと、祖山愛の惻湧きとが窺はれて床しい。山乍らの文化を開いて底の底迄を敲いて進展上の雄者たらんとする聖子の睦みは何時其の望まる、世へ眞に振舞ふ事が許されるか知ら！ドウモ争ひは人生觀での父であり、不満は若き人々の捨て難い情の一面の力だ。大正十二年……其れは開祖御入山六百五十年の奉祝會の秋であつた。一年の経緯から繰出さるゝ本會の結果は如何に纏られしか、別に詳細に亘る事は年内逐次身延教報誌上に擧げた事故、又紙數の許さない所でもあれば茲には大要の事件を記して以つて一般への感謝と、希望とに及ぼう。

昨年度の會報に次で

十一月十日……前身延教報記者黒澤松南氏の編輯「立正」の創刊に際し寸志を表して祝す

一月五日……本院生親睦福引會執行太田文學部幹事此に當る

一月十五日……帽章改正の件中以五以上集合して協議確定、同學會準備委員として結城瑞光君江原亮勇君渡邊泰深君松田文逸君等な推選す。

二月十六日……宗祖降誕會例年に比し異りし事なし夜間學生劇精

々近年に無き盛を見る。

三月十九日……卒業生送別茶話會並ニ高木教師(友章)の送別會を開く、岡幹事開會の辭に次ぎ高山君中等部代表深澤君高等部代表の祝辭あり代りて高等部結城瑞光君中等部富田海音君の答辭あり副會長訓辭教學部長告辭に次いで高木教師の送別に移る學生代表江原亮勇君の送別演説、高木教師の答辭ありて閉會の辭太田幹事負ふ

三月二十三日……學院長法主小泉大僧正御遷化

御法號……本信院日慈上人

三月二十五日……雜誌『棲神』製本完了有志關係者に對し三百部發送す

四月十五日……教授伊丹靈瑞師退職御退山に就き紀念品贈呈

四月二十三日……故日慈上人御本葬、學院師徒は總べて本院委員の命により服務す

四月二十八日……建宗會、兼て松木本興、中島清春兩師新任教授の歡迎茶話會を行ふ

五月三日……宗祖御入山六百五十年紀念事業として一大宣傳をなすべく假布教場に祖傳模型裝飾をなす期間内各場毎に學生説明者を配置しエハガキ販賣布教等に當らしむ

五月十五日……道路大學宣傳を初め岡幹事全任を負ひ宣傳箋二萬枚を印刷して配布す

六月二十六日……定期大會……午前八時より

近年に無き緊張味を見る中等部より提出の『中等部改造の件』あり端なくも中高對立となり騷擾を呼び午後四時終ひに留會に至る同二十六日續會を開き協定す購賣部細則制定(深澤君提出)可決、

幹事改選左の如し

中等部

高山 忍君 二七票 (辭任)

神田 義法君 二五票 (當選者)

松村 文光君 一六票 (當選者)

立谷 長康君 一二票 (當選者)

高等部

野崎 學穩君 二五票 (當選者)

江原 亮勇君(再) 二三票 (當選者)

渡邊 泰深君 一八票 (當選者)

安藤 恭善君 一七票 (當選者)

六月二十七日……幹事任命

辯論部 江原 亮勇君

運動部 野崎 學穩君

文學部 松村 文光君

會計 神田 義法君

七月一日……本學院生佐藤海澄君亡母の追善の爲め埋木細工文鎮百十三個寄贈す

八月三日……市川新法主御入山式

九月十二日……震災救済義捐金として金額二百圓身延村長を経て本縣廳へ提出の手續をなす

九月十三日……前幹事四名に對し謝禮として頭書の冊子を贈呈す

「日本國体の研究」

岡 觀 修君

「印度哲學宗教史」

太田 純志君

同 下田 光泉君

立谷長康君

十月三十一日……中等部一年級より今回聖墓會設立の事、書類取纏

め右綴長より届出あり直に副會長へ申告す

十二月十八日……入營者松永良詮（中一）に對して贖として書籍一

贈呈す

二月十六日……(十三年)宗祖降誕會

本年は例年の晝間裝飾を全廢し、十三、十四二日間地方布教に赴き十六日夜間は學生宣傳劇を開く、本年は總べて委員組織に變へ準備實行決算に關して委員參與し幹事此を處理す晝間布教部は別に辯論部報に擧ぐ夜間演藝左の如し

順序

一、小供會宗歌
午後六時十分

一、開會宣言

江原幹事

舊劇
大王
二

一、大正壁坊
二、嘉

一、觀音の眼
二幕

時代悲劇

一、愛スレバコソ
二、幕

一、愈舞
櫻狩

印度聖劇
一、聖者の後半生
三幕

作者 鈴木 敦

一、西洋大奇術

大喜劇

一、娘の鯉 四幕

一、電氣應用 降誕の曉
一、天人舞
一、閉會の辭 江

江原幹事

以上 午後十二時半閉幕。

顧みるに過去一ヶ年の消長は星々繰返さるる行事には過ぎないが、確かに學徒の氣勢は進展の間に日夜昂まつて來て居る。院長市川法主な會長に、教頭富木義廣師を副會長に、小川教授、辯論部長、中條教授文學部長、松木教授運動部長に各師の英裁に依つて幹事其の實務に酬ひて、一般學生の襟度ある充實心に唆かされて聊か會の面目と方針とを廣めて行く事は何と云つても喜ばしい、聖團の睦みが自ら躍如として山の隅々に輝き初めて居ればなるまい。未だ癡せざる生命者の對時だもの何で精華を實らさぬわけには行かう。

辯論部報

[illegible]

從來の講演部を本年度の定期大會に於て辯論部と改名するに至つたのは、澄澗たる氣慨の所有者たる 一百余の祖山生が自然に對して其の辯舌を練つて居る 歴史は決つて單時ではない。四季交々或ひは岩壁に登り、高丘に至り、綠樹密林を友として獅々吼の日を續けて居た事の積重!! 是がドウシテも講演の境から立脚を變へて辯論の希望に面した 所以でもあつたらう。一般社會の辯舌に較べてもだが殊に宗教家の動く所として此の辯論の必要を感じない事はない。雄辯は人格の聲であり、人生における 最も 高い證明であり、人間生活の最大代表であると云ふ。而かも新文化建設に 倦きを知らない、急忙楊裡の民衆を最も能く擔ひ得るものは是亦偉大なる雄辯である。

近代の祖山雄辯史!! 其れは矢張り此の學園の裡に其の豊饒な材料